

植物染めで、日本古来の色文化を現代にのみがえらせることに半生をかけた人だった。染織史家で京都・伏見に工房を構える「染司そめつかさよしおか」5代目の吉岡幸雄さちおさん。夏にあいさつを

作業による幾つもの工程が必要で、時間もかかる。出版社の編集者だった吉岡さんが40歳を過ぎて老舗染屋を継いだ際、「しんきくさい。もっと早くできへんのかいな」と機械を導入

## 日本の色名

させていたただいたばかりで、9月末、73歳での急逝にただただ驚いた。

花や果実、根や樹皮など自然の素材に潜む色素を、糸や布、紙に導いて繊細な色を生み出す植物染め。手

するなどいろいろ試した。結果はさんざんだった。

三女で跡を継いだ更紗さんはそんなエピソードを、急逝の2週間後にパネリストを務めた広島・京都文化フォーラムで披露してくれ

## 潮流

文化部長 山中和久

た。「植物の声を聴けば美しい色を出せる。父が経験の中で見つけた」とも。

染め技法の多くは化学染料に押され廃れた。染料の植物には絶滅が危惧されるものもある。ならば、いにしえの無名の職人に学ぶしかない」と吉岡さんは考えた。

先頃、関西圏で追悼番組が放送された。正倉院文書などをひもとき、染料の産地を全国に探した。現地の農家に栽培を頼み込み、長い歳月を掛けて天平の色を再現した姿があった。平安期には四季折々に咲

く花などを冠した色名が増え、貴人たちが衣にまとった。源氏物語は「偉大なる教科書」と言い、54帖に描かれた衣装を復元した。日本の色とは季節の移ろいを感じ取る文化であり、人と自然の関わりなのだ、業績を振り返り思い至る。

「青紅葉」「初紅葉」「紅紅葉」「散紅葉」…。秋が進むに連れて変わりゆく色名を、6代目として歩み始めた更紗さんが教えてくれた。週末あたり、中国山地へ車を走らせて感じてみようと思う。